

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 29



屋根付き橋（喜多郡内子町）

柳原あや子さん 作

特 喜らしと環境 集

『美観から社会環境を考える』

- 甦れ農村
- トイレ文化雑感
- 環境美化の先導役として
- 花いっぱいのもちづくり
- 「水の都」のもちづくり

アングル

まちづくり雑感.....愛媛銀行会長／宮武 隆..... 3

① 暮らしと環境 ②

『美観から社会環境を考える』

- ・ 甕れ農村.....内子町／政岡 章..... 4
- ・ トイレ文化雑感.....松山市／宮内 理..... 6
- ・ 環境美化の先導役として.....魚島村／佐伯 真登..... 8
- ・ 花いっぱいのもちづくり.....城川町／西岡 健治.....10
- ・ 「水の都」のもちづくり.....西条市／高橋 俊輔.....12

ふれあい広場

- リレーでちょっとーク（松山市から）.....14
- 元気印レポート.....16
- <私たちはこれからです・いきな女性塾>
- <地域に風を やれば出来る 我らの風車・正山風の会>

レポート

- 『自分の殻を打ち破れ』～まちづくり先進地みて歩記～.....20
- まちづくり見聞録 i n ヨーロッパ.....23

Information

- 媛のくにフラッシュ.....25
- <新居浜市・伊予三島市・松山市・中山町・河辺村・瀬戸町>
- TOWNタウン通信.....28
- 愛媛県組織改正.....29

特集「暮らしと環境」

今号のテーマ

「美観から社会環境を考える」

「舞たうん」では、前々号より環境問題にスポットをあて特集を組んでまいりましたが、今回はその最後として、「美観から社会環境を考える」と題して、ふるさと景観・トイレ文化・清掃美化活動・花いっぱい運動・水辺景観をテーマにそれぞれの分野で実践されている五名の方々にご登場願いました。

熱帯林の破壊、地球の温暖化や砂漠化、大気汚染や水質汚染、さらには動植物の絶滅、廃棄物の増加など、現実の地球環境が抱える問題は大きなものがあり、これまでのわれわれの経済活動や生活の在り方を変えなければ、地球と人類の未来はないと言われるまでになっています。

このような中、地球サミットが開催されるなど、地球規模の環境保全が叫ばれるようになってきています。が、実践に当たって一番力になるのは、子供たちに安全で美しい故郷を残すため、身近なことから生活見直しを実行する主婦たちだそう。環境対策はまず身の回りから、個人・家庭そして地域ぐるみの地道で力強い取組みが必要なのです。

表紙のことは

屋根付き橋(田丸橋)

県下に屋根付き橋が点在している事を最近になって知りました。

新旧合わせて10橋ぐらゐを、写真に収めている方がグループにいます。

畑仕事に出て、涼を求めて腰を下して一服もよし、雨やどりもよし、改めてこの橋を眺めていると、集落を結ぶ大事な橋の上に、人と人との暖かいコミュニケーションを感じるような一時でした。

柳原あやこ





今、まちづくりは、

私共金融機関が直面してい

る金融の自由化と同様、「自由化

の時代」であると言う人もいます。

まちは消滅はしません、自然体

でいますと、時として、人、情報、

資産等が、発展している他のまち

の方に移ってしまうほど、大変厳

しい状況下にあるということから、

自由化という発想がでたのだろう

と思われまます。しかし、一口にま

ちづくりが自由化にあるといつて

も、いろいろな考え方や方向があ

ろうかと思えます。

伝統文化、諸行事、地場産業、

景観等を保全維持しようという考

え方、一方で、開発、ニュービ

ジネス、C I、イベント等を積極

的に行うという考え方、あるいは
 両者をミックスしながら進めると
 いう考えもあるでしょう。いずれ
 の考え方も妥当なものと思えます。

このように、まちづくりは多様

化しておりますとともに、そのコ

ンセプトは人により、時代により、

地域により異なっております。そ

れは当然のことですが、人に例を

とりまして、私一人人でさえ自

分の思いがあり、自分流の美学が

あるわけですから、それだけでも

モノカルチャーにはなりません。

これらのことから、まちづくり

を成功裡に導くためには何といっ

ても、まずコミュニケーションづ

くりが基点という考えを私は持つ

ております。

東京一極集中や東京症候群と言

われるものの弊害等もあり、地方

の時代、地域主義がクローズアッ

プされておりますが、ふるさとの
 まちづくりは、単に生活環境の向
 上だけではなく、ふるさとの伝統
 行事、風景等心に潤いをもたせ、

心に豊かさをもたせることも、よ

り大切となっております。しかし、

私どもの生活環境が格段の進歩を

遂げた現在、地方にあっても都市

機能を充実させることも重要であ

り、居住環境のいろいろな施設、

例えば文化、医療、スポーツ、上

下水道等の生活基盤が整備されれ

ば、若者が住んでくれるまちにな

ることもより可能となるわけで、

まちづくりの理想とするバランス

のとれた三世代の人的構成も期待

できます。しかし、決してリトル

東京的なものとせず、个性的で独

自性を発揮させるものが要求され

るでしょう。そこにはニューメ

ディアも必要であり、情報化地域

社会を目指したまちづくりが要望

されます。

また地域社会の担い手である人

づくり、つまり、教育（共育）も

緊急の問題です。とりわけ、まち

づくりを強力に推進する上で、幅

広い視野をもち、優れたリーダー
 シップを発揮できる人が中心にい
 ることが、成功に導く要諦と思わ
 れます。

そこではやはり、行政、住民、

企業が手を携え、先見、指導、行

動、決断を要し、異なった意見も

尊重の上、みんなのエネルギーを

結集してはじめて、地域に根ざし

た、ロマンあふれる潤いのあるま

ちづくりが期待できるのではない

でしょうか。

私共銀行も、ともにできる限り

のお手伝いを厭いません。共感を

得、幸福感にひたることができ、

生きがいを感じるまちを、愛媛県

下すべてに作りたいと念じており

ます。

「美観から社会環境を考える」



甦れ農村

石畳を思う会
前会長 政岡 章



平成の時代から二十一世紀をいかに生きるかと、自分達が住んでいる地域を考えたとき、いままでのようにただ経済性を求め、他の地域と同じように普段の生活をしていて、果たして地域の存在価値があるのだろうか。

このような疑問と廃れゆく不安感から、「自分達に出来ることは何であろう」「農村に住んでいて良かったと思えるような地域とは何であろう」と考えたとき、地域づくりは始まるのだと思いはじめた。昔の農村での暮らしは、春は鶯の声で始まり、萌えるような新緑に囲まれ、夏にはホタルの乱舞に見とれ、蟬時雨の中で涼をとる。秋には収穫の喜びを味わう一方で、素晴らしい紅葉を知る。冬は雪の中で一年の計を立てる。コットン、コットンと川べりの水車が米を搗

く、どの家も早朝にはかまどの煙がのぼり、夕暮れには薄暗い灯が点る。いかにものどかな農村風景であった。このような農村が来世紀に再現できればと願うのは私ばかりではない。

「石畳を思う会」は、おぼろげながらこのような夢を持つ十四名の組織である。

スタートの時期には、半年にわたってお互いの腹の内を語り、世間を知らうと先進地の研修が提案された。

行った先は、鳥根県吉田村。そして聞かされたことは、

「経済を前に出すことではなく、文化を中心据えた村づくりが大切である」とは、藤原洋氏の弁であった。

自分達の地域に、「文化」なる



ものがあるか、色々考えた当座の結果が水車の復元である。水車と精米、農村風景を「農村文化」として位置付け、先ず手初めに水車を復元し、精米を考えようと話は纏まった。「資金は、大工は、場所」と問題は数多い。

メンバのやる気があれば強いもので、「資金六十万円は皆で負担しよう。数回の飲み代を節約すれば調達できる」ということになり、大工さんは、四十年前に作ったことがあるという職人が地元にいることを知り、半分ボランティアで参加してもらった。場所は、名水といわれる大清水の溪流のそば

で、西本さんが名所にしたいと、二十年来手掛けた景勝地。後は、会員の働きばかり。

平成二年の冬からスタートし、

五ヶ月間を要して六月に完成した。恐らく手作りとはいえず、県下で一番安い水車であろう。施工の間は、地域の中からも暖かい励ましの声をかけて頂いたり、いまどき水車などと笑われたり、どうせやるならもっとましなことをと提言を受けたりしながら、喜怒哀楽の中の完成であった。

姿形は質素であっても、多くの方々から評価されるにつれて、不承不承ついてきてくれた会員はもとより、地域の人達の水車を見る目が変わってきた。陰で手を貸してくれる人達が現われた。「石畳を思う会」の存在がやっと認められようとしている。このような小さな行動が人々の心を動かし、地域を動かそうとは会員のだれしもが思ってもいなかったことで、この重大さを身をもって感じている。

このような地域の動きは行政の中にも波及し、県単事業を導入して、茅葺民家の復元と水車公園を整備していただくこととなった。これまでの地域集落施設は、鉄とコンクリートによる都市型施設が

全てであったが、この事業による農村らしい施設は、新しい価値を生むであろうと期待しているし、私達の活動の場が拡大したことで気持ちを引き締めている。

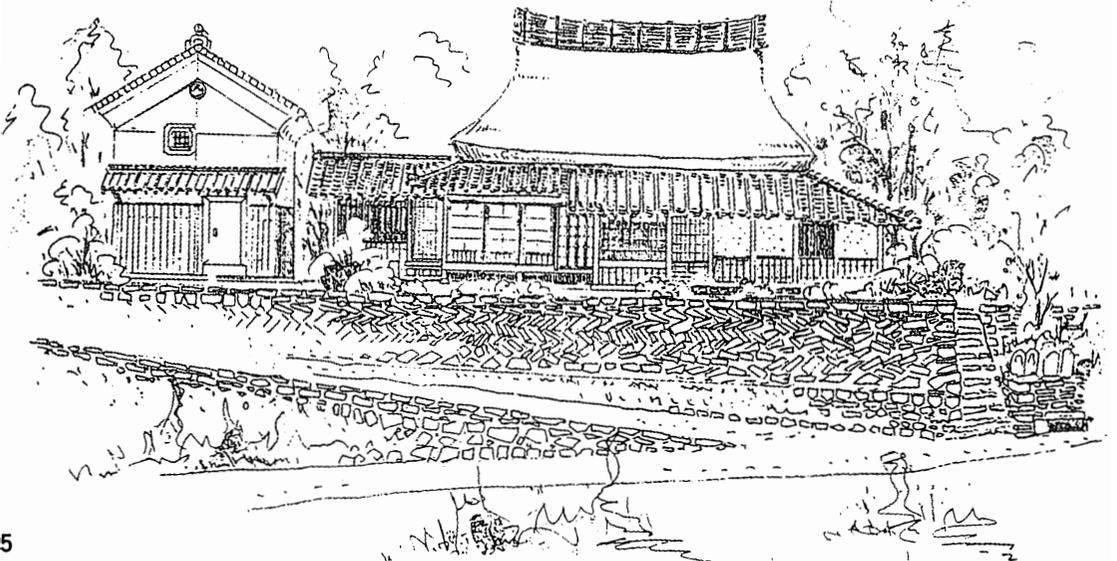
「石畳を思う会」は、さらに水車を増設しようと準備を進めているが、施設作り以上に考えなければならぬことは、これら施設の活用をいかに具体化させるかが課題だということである。

これまでの公共施設は、自らの生活の中で利便性を求めて使えば良かったが、水車にしろ、民家にしろ、日常の生活から離れたところの施設だけに、何を目的に使いこなせばよいのか、いよいよ正念場である。そして、多くの町民が石畳地区住民の新しい動きに関心を寄せているし、期待されているし、中には止せばいいのにと冷笑している人もいるだろう。いずれにしても会員の真の力量が試されるのはこれからである。

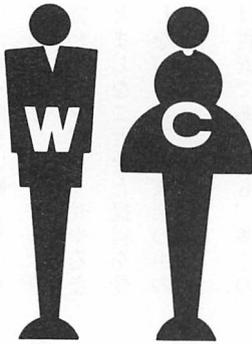
私達の夢は、農村が持つ良さを甦らすことにより、「心の豊かさ」を味わうことのできる地域づくり

を進めることである。森があり、溪流があり、棚田がある。辺地の不便さはあるが、お陰で本当の農村の姿が実存している。内子町では、「むら並保存」を二十一世紀の地域づくりのテーマとして考えているが、これを運動として下で支えていくのが私達の務めである。

同時に、ややもすれば忘れ去られようとしている水車作りの技術、茅を葺く技術、山菜を美味しく食べる料理方法など実に沢山の農村文化が残されている。手掛けたいことは山ほどあるが、活動はボランティアの範囲である。これまでの価値観から少し離れたところに本当の地域づくりのキーワードがありそうである。そして、一味違った人づくりを期待して。



「美観から社会環境を考える」



“トイレ文化雑感”

松山市 宮内

おさむ 理



最近、私は「トイレ文化」とは、

極力言わない様になっている。トイレというところ、どうしても軽く感じ、水洗便所を想像するからである。「雪隠文化は」…と話す時、少し汚らしさと、昔を偲ばせる語感があるから「雪隠文化は」と言い換えている。

「雪隠」、嫌な場所である。好かれる場所ではない。私の少年時代の頃、用を足しに行くには一度建物から出て、下駄に履き替え、別棟の便所へ行っていた。冬の吹雪の日とか、夏の雨降りなどは恐ろしくて、一人で行けなかった。雪隠とは、臭くて、暗くて、お化けの出る恐ろしい隔離された場所であるというイメージしか残っていない。そう言う日陰物として扱われてきた雪隠を、より文化的な建築物へと変え、環境を良くしよ

うというのが、トイレ文化のテーマではないだろうか。

便所は大きく二つに分けられる。一つは、建築物内の人が使用する便所（住宅とか事務所等）。もう一つは、不特定多数の人が使用する公衆便所である。

一つ目の便所は、経済が成長し豊かになるにつれ、スローではあるが、着実に4K（臭い、汚い、暗い、怖い）追放は進んでいる。少し言い過ぎかも知れないが、自然に文化的な便所へと進んで行く事は間違いないのではないだろうか。

二つ目の公衆便所は、この十年求急激に良くなり、確実に数も増えた（市街地の便所は思っている程増えていない）。特にここ数年来は、数千万円の便所がばらばらと建っている。気分よく用を足すには、たくさんのお金が掛かるという事が、一般的に理解されてきた様である。（㊦お金を掛ければ良いというものではないが、ある程度、お金を掛けないと良い物はない）

二十数年前だったら、ブロック建の汲み取り便所がごく普通であった。その便所が数年も経てば、落書きがいたる処にあり、小便器には煙草の吸殻や落葉が溜り、臭くて汚い便所に変わっている。それが通り相場だった。設計の仕事で、若いときにまず最初に与えられるのが、倉庫か便所であった。

便所等は教材であった。その当時は思いもよらなかった事である。要は、用を足せるだけの建物を設計していれば良かった。私は最近、公衆便所を設計出来るのは、一人前の設計者であるかと判定している。

もう、便所は教材ではない。先日、ごく最近完成した中山町の公衆便所を見に行



った。若い時に設計したブロック建の汲み取り便所とは違い、三角形の木造、コロニアル葺の約三五坪（一一四平方尺）の建物である。建築費は約五千五百万円（坪当たり百六十万円弱）である。五千万円を越す便所が出たかと思うと感慨深いものがある。

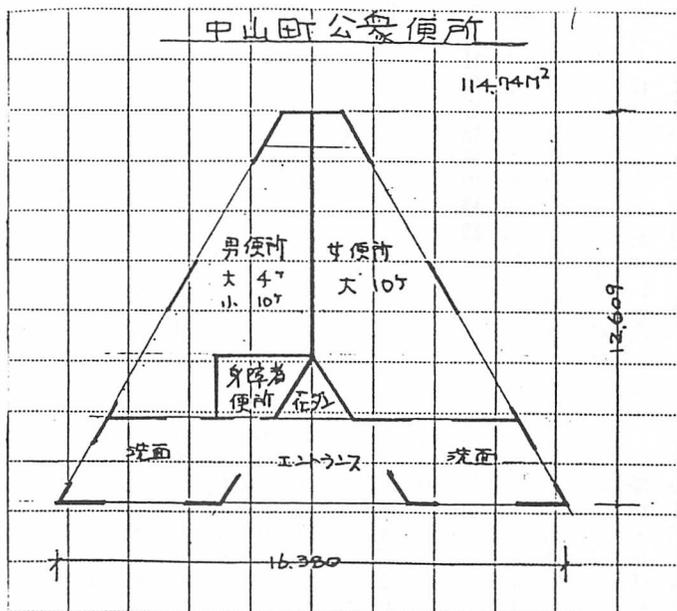
便所へ入ると、正面に花壇と、エントランスの左右に洗面室、その奥に男女別の便所があり、全て床は大理石貼りである。一瞬、百貨店かと錯覚する。床が大理石貼りには驚いた。公衆便所に大理石の床、少し行き過ぎの感じがした。後で目的を知ると納得した。バスのトイレ休憩のための便所。そのバスの客をクラフトセンターへ案内するのが主な目的であるとのこと。トイレ

休憩さレ休憩させて、特産物を売り、宣伝しようというのである。客



「中山町公衆便所」の中

寄せ公衆便所である。床に大理石を貼るのも分かる様な気がする。



私がなぜ、

県下でもトップクラスの公衆便所を紹介したかというところ、公衆便所が雪隠のイメージの時代を離れ、文化的なトイレが根付きつつある証であると言ったのである。

あの公衆

便所を外国人でもが使用すれば、中山町は素晴らしい町だと感じて帰るだろう。公衆便所とは、その

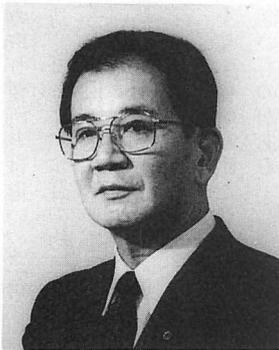
ぐらい感じさせる力を持っている。私などは、数多くて清潔な公衆便所のある市町村は、何となく文化を語れるところの様気がする。ただ、ハードの面は急激に整備されてきたが、ソフトの面は旧態依然、あまり上手に活用されていない。

い。

先日、或る市街地の新しい公衆便所に入った。すると、大きな窓のアミ入りガラス（ガラスに網が入っていて、割れにくい）が割れ、人が出入り出来るぐらい大きく抜けている。想像もつかない割れ方である。私はそれを見て恐ろしいと感じた。もうその便所では用を足すまいと思った。もし女性が入るなら、監視付き、二人掛かりの使用である。中山町の便所も、これからの様に使用されるか非常に気になるのであり、どの様に管理していくか、興味のある所から、地域環境がどの様に変化し、住民がどの様に変化して行くかも興味深い。

トイレ文化とは、「いかに使用させるか」ではなく、「いかに使用してもらうか」ではないだろうか。私はその様に考え、これから公衆便所を見て行きたい。

「美観から社会環境を考える」



環境美化の先導役として

魚島壮年会会長

佐伯真登

一、島が沸いた日

昭和六十三年六月六日(月)午後一時から、東京は千代田区の有楽町朝日ホールで行われた環境庁長官表彰式で、魚島壮年会が環境美化功績者として表彰された。

そのころ、壮年会の本部のある魚島村開発センターでは、四十名余の会員が祝杯をあげ、今後の島づくりに夢を馳せ、より一層の活動を誓い合った。

浜部正壮年会会長(当時)は、「会員が一丸となって取り組んできたささやかな活動が、長官表彰につながったのであるが、壮年会という組織が国から認知され、評価されたことも大きい感激である」とその喜びを語った。

村人たちも、一様にこの名誉に拍手を送ってくれた。

二、壮年会結成の経緯

「壮年は、青年団活動のベテランであり、家庭の大黒柱、地域の実力者であるが、その知恵と経験と力が地域で生かされていない」という反省から、昭和三十四年三

月、佐伯増夫氏(現魚島村長)の指導により、青年団活動を終えた三十歳以上の壮年が相集い、「政治・経済・文化に関する教養を高め、住みよい郷土づくりに努力しよう」と結成されたのが、我が魚島壮年会である。

三、活動のあらまし

結成当時は、地域の諸問題についての学習や話し合い、親睦等が中心であったが、昭和三十年代後半からは、過疎の進行により弱体化した青年団を応援して、盆、祭りを始めとする地域の伝統行事の活性化に努めるとともに、社会教育団体の中核となり、積極的な学習と実践活動を推進している。

したがって、長官表彰の対象となった地域環境美化も、壮年会活動の中で大きいウエートを占めているが、その一環なのである。

そこで、環境美化を含めて、ユニークな活動事例を二、三ご紹介したい。

◎環境美化活動

その昔、大漁祈願のため、井の

浦海岸に建てられていた毘沙門天碑の再建や、三十年も海底に眠っていた吉田磯の大漁記念碑の再建など、壮年会ならではの事業は、村内外からも高く評価されているが、毎年定期的に行われている活動は次のとおりである。

◎港内清掃

海の汚染、とりわけビニール公害が問題となつて久しいが、ビニールは海底に張りついて魚類の繁殖を妨げ、海上を浮遊して、エンジントラブルの原因になるなど、



海をきれいに、港内清掃

漁民にとっては死活問題となっている。

潮流の関係で、港内にも多量のビニールが漂着してくる。このため壮年会では十年前から、定期的に港内の清掃を行い、収集したビニールは乾燥して焼却するなど、海を守る運動の先頭に立っている。

○篠塚公園整備

その昔、村上水軍の見張所があったといわれる篠塚の森は、財宝伝説でも有名であるが、いつの間にかニセアカシヤが繁茂し、荒廃したままになっていた。

昭和五十五年から壮年会が公園整備に取り組み、緑の少年団や婦人グループの協力を得ながら、雑木伐採、植樹などを進めた結果、村民のオアシスとして生れ変わり、魚島の新名所の一つとなっている。

○一周道路の整備

魚島の一週道路は、幅員三メートル、延長は僅か六キロメートルであるが、昭和五十六年より壮年会が中心となり、婦人会や緑の少年団等と協力して、路肩に桜の木が植えられ、春になると花見がて

らの遊歩道ともなっている。

しかし、夏期には雑木雑草が生い茂って、桜木の成長を阻害するばかりでなく、車の通行にも支障を来たすほどである。

このため、壮年会が先頭に立ち道路の草刈作業を年二回実施している。夏期の草刈作業は重労働であるが、全会員が参加する共同作業は、能率も上がり、会員の連帯感強化にも役立つている。

このほか年三回の村内一斉清掃、江の島吉田磯の大漁松二世植樹、海岸通りの花壇づくりなど、壮年

会は常に環境美化活動の先導的役割を果たしている。

◎その他の活動

○えびす祭

漁祭とも云われ、かつては網元が個々に行っていたものを、壮年会の発案により、昭和五十七年に、当時の末広功会長が手づくりでえびす神社を建築し、毎年四月下旬には、神社前広場で村を挙げての賑やかで活気のある祭りを開催し喜ばれている。

○海の運動会

昭和五十九年、壮年会員が手づ

くりの伝馬舟二隻を建造し、三十七年ぶりに海の運動会を復活させ、以来お盆の楽しいイベントとして島の人たちの人気を集めている。

このほか、村おこしシンポ、各種学習会、秋祭りの演芸大会など各種の事業を推進しているが、このことが青年団や婦人会など他団体の活動にも刺激を与え、村の活性化にも繋がっている。

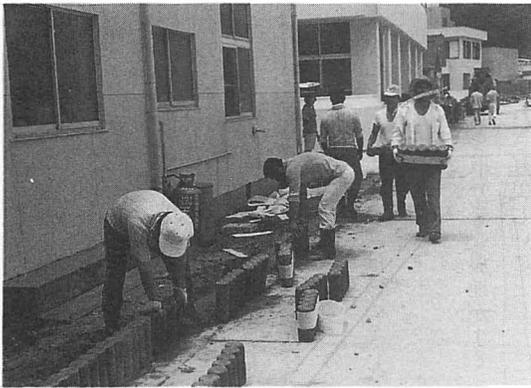
四、おわりに

現在、県下三十五市町村に壮年会（壮年グループ）の結成がなされているが、まちづくり、村おこしへの取組みは今一歩であり、昭和五十六年に発足した県壮年会連絡協議会への加入市町村は十指に満たない。

全市町村に壮年会が結成され、県連へ加入し、情報交換や連携を深めながら、活発な学習と快適な環境づくりを基盤とした地域おこしの諸活動が進められんことを心より願うものである。



雨の中の奉仕活動

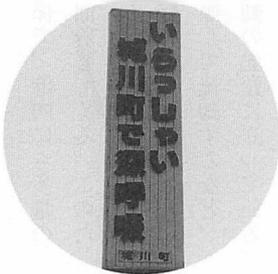


海岸通りの花壇づくり

花いっぱいのもちづくり

城川町役場

西岡 健治



▼はじめに

豊かな自然の中に温かい人情が息づく歴史と文化の町、奥伊予城川町は、県都松山市から南西へ約八十キロ。四国山地の懐に抱かれた、ひと山越えれば高知県という県境にあり、総面積百二十七・三平方キロメートルの内八十二パーセントが山林で、人口も昭和二十五年をピークに減少が続き、今では五千六百八人の典型的な過疎の町です。城川町への入口である野村町境と日吉村境の国道一九七号線沿いに「いらっしやい城川町で深呼吸」の立看板を設置しています。この短かい標語の中に、町が進めているまちづくりの思いが込められているのです。

▼わがむらは美しく運動

城川町のまちづくりの基本は、昭和五十八年からスタートした「わがむらは美しく運動」です。この運動は、昭和五十七年、農村振興協会主催のヨーロッパ視察旅行に参加した町長が、ドイツのオーバーンデン村のまちづくりに感

銘を受け取り組んだものです。

この運動には、次のような三つの基本的な考え方があります。

(1) 生活環境が美しいこと

誰でもすぐやれる運動が、環境の整備である。まず、自分の家庭とその周辺を一人ひとりが美しくしながら、その和を広げて花いっぱい美しい環境をつくる。

(2) それを取りまく農地がよく手入れされ美しいこと

昭和五十一年度から総合的なほ場整備を実施してきた水田・畑等の農地に、年中緑の衣を着せて農業の振興を図りながら農村の美しさを保つ。

(3) 農地を取りまく山林がよく手入れされ、適地適木で美しいこと

戦後植林が進められ、六十パーセントを人工林が占めている。今後、林道網の整備により除間伐を推進し、優良材生産を進めて緑の保全を図

り、美しい山林をつくる。また、今残されている天然林を大切にしたい。そして手入れを行っていく。

この住宅・農地・山林の三つがよく手入れされ美しければ、町内全域が自然公園のようになり、住民は公園の中で生活し、農耕を営む町となる構想です。

この「わがむらは美しく運動」の一環として、「花いっぱい運動」

を展開しています。運動の中心的役割を果しているのが、役場の職員で構成されているプロジェクト





トチームです。このプロジェクトチームは、大字ごとに班長を設け、担当地区内の「花いっぱい運動」の推進にあたります。公園などの植樹をはじめ、国道・県道・町道にいたる緑地や空地、公共施設に花壇を整備し、今では、六十ヶ所余りになっています。この花壇は、それぞれ責任者が決められ管理されています。花苗は、地元の農家や農業系の高校に委託して、年間約二十万本育てています。花苗は公共の花壇に植えつけるほか、町内の全家庭にも配布しており、春にはパンジー、金魚草、テルスター、夏から秋にかけてはサルビ



ア、マリゴールド、ペゴニア、冬には葉ボタンなど四季折々の花を咲かせています。花は生き物であり愛情を持って育てれば、それに応えるように美しい花を咲かせてくれます。町内全域の環境美化を進めて行く上で、住民の理解と協力なしでは出来ません。城川町では、美しい環境のまちづくりを進めるため、コミュニティ活動による道路、河川の清掃を行っています。町内には、県道・町道・農道・林道等の道路があり、これらの清掃を五月から十月にかけて年四回程度行っています。また河川については、

夏場に年二回ヨシ刈り等を行ない、子供達が河川で水に親しむことが出来るような環境作りをしています。

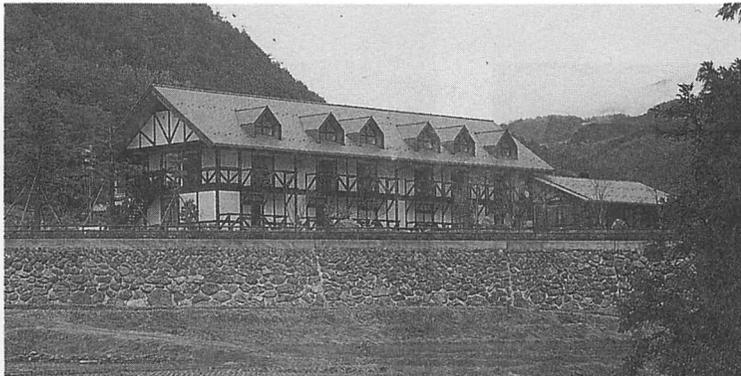
「わがむらは美しく運動」の財源には、ふるさと創生資金を積み立てた「わがむらは美しく運動基金」が充てられています。

この基金を利用したもう一つの事業に「城川町自ら行うふるさとづくり事業」があります。

この事業は、住民自らが企画実践するふるさとづくり事業に対し、補助金を交付して支援するものです。平成三年度には、各地区婦人会による花いっぱい運動の支援、各地区の文化財・太鼓等の修理、ふれあい広場の整備等に補助金を出しました。この基金により住民の参加意識も高まり、継続的に花いっぱい運動が展開できるようになりました。

最近、城川町にも多くの方が訪れるようになり、観光と併せたまちづくりが必要となってきました。そこで、町内に特徴のある五つの拠点（宝泉坊温泉・森林浴

の森電沢寺緑地公園・三滝溪谷自然公園・城川町総合運動公園・町の最高峰雨包山森林公園）を整備し、これらのポイントを有機的に結びつけ、豊かな自然と伝統文化を生かしながら長期滞在のバカンスが楽しめる、花いっぱいの中で心



宝泉坊ロジ

身共にリフレッシュできる保養地づくりを目指しています。

「水の都」のまちづくり

西条市役所

高橋 俊 輔

■水の都西条

西条市を紹介する文章には、必ずといってよいほど、この「水の都」という言葉が掲げられています。

事実、当市はきわめて良質で豊富な地下水に恵まれており、市民アンケートにおいても、愛着を感じ、誇りに思うものの第一位に、「水・うちぬき」が挙げられています。

しかし、高度成長期以降の都市化の進展に伴い、一時期、当市の水路はかつての清冽さを失い、「水の都」とは名ばかりではないかといった、市内外からの批判の声もありました。

そうした状況の中から、市民と



行政が手を携えて、「水」を活かしたまちづくりに取り組んできた結果、「水の都」は甦りつつあるのではないかと考えていますが、以下、その具体的な事例をご紹介します。

■アクアトピア

近年の西条市のまちづくり事業の代表的なものとして、先ず挙げられるのは、アクアトピア事業ではないでしょうか。

この事業は、建設省の指定を受け、昭和六十一年度から平成元年度にかけて、総事業費約十一億三千万円を投じて実施したもので、因みに「アクアトピア」とは、アクア（水）とユートピア（理想郷）を合成した造語で、日本語では親水都市と表記されています。

アクアトピア事業の目的は、下水道整備を行うことにより、姿を消した水生生物を甦らせ、清らかな水辺を復活させて、住民と水の結びつきを深めることにあります。

具体的な内容としては、湧水で



アクアトピアの「親水デッキ」

ある観音水を源とし、旧西条藩陣屋跡の堀までを流れる市街地内の河川約二・四キロメートルを五つのゾーンに区分し、それぞれ特色のあるテーマにあつた愛称をつけ、自然石による護岸改修や水辺の緑化などの整備を行いました。そして、各ゾーンには、噴水・湧水モニュメント・親水デッキ・親水階段・花時計・ホタルの里・散策路などが整備されています。

このうち、ホタルの里では、数年来、ホタルが生息しやすい環境を整え、ホタルの幼虫とその餌になるカワニナを放流しています。今年も既にホタルが飛び交っており、夜になると、これを鑑賞する人々が集まるなど、かつて市内のあちこちで見られた光景が再現されています。

このようなアクアトピア水系は、単に市民の憩いの場となっているだけでなく、環境美化のためのボランティア団体が自然発生的に組織されるなど、ハード、ソフト両面で「快適環境都市」を目指す当市のシンボルの存在となりつつあ

ります。

■御舟川緑道

次に、同じく湧水を源とする河川を利用した水辺環境整備事業として、御舟川緑道についてご紹介します。

御舟川は、市街地の東部を流れる普通河川で、この川の下流部沿い約一・一キロメートルを昭和六十一年度から緑道公園として整備を行っています。

前述のように、御舟川も一時期かつての清らかな流れを失っていましたが、下水道の普及に伴い、徐々に清流が甦りつつありました。

そうした状況に着目し、緑道公園の整備を始めたわけですが、この公園は、その名のとおり幅十メ

ートルから二十三メートルの細長い遊歩道を主体とした公園で、御舟川の水を愛で、あるいは触れながらゆつくりと散策できるような水辺空間の形成を目指しています。

既に、一部区間の供用が開始されており、園内には、「花と緑の博覧会」で展示された「樹水華」を譲り受けて設置し、夜間のライトアップによつて幻想的な雰囲気醸し出すなど、従来当市にはなかった型の公園として、市民の新たな憩いの場となりつつあるのではないかと思えます。

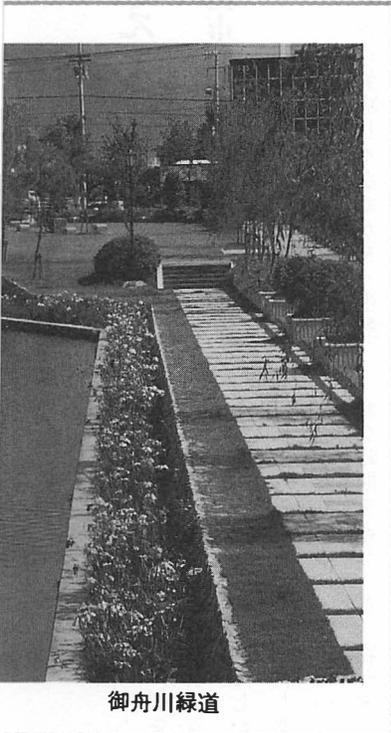
■水を活かす

以上二つの事例をご紹介しましたが、当市ではこの他にも、各種施設整備や街路事業等においても、

「水」を活かすための様々な工夫を凝らしながら事業を実施しています。

もちろん、このようなまちづくりは、まだ緒に付いたばかりといても過言ではなく、これまで実施してきた事業についても色々な意見があり、今後も試行錯誤を繰り返していくことと思えます。

しかし、市民と行政が互いに意識を高めあい、協力して、美しく住みよい「水の都」を築くために、弛まぬ努力を続けていきたいと考えています。



御舟川緑道



食べ物の大切さを考えよう

松山市 門田 征吾

……リレーでちょっとトーク……

私が料理人の世界に入ったのが、昭和三十四年。当時はまだ、ホテルといっても帝国ホテルや日活ホテルの様なところしか無く、東京オリンピックを迎える頃に始まった第一次ホテルラッシュと云われる頃から、ホテルオークラやホテルニューオータニ等の近代的なホテルが順次生まれました。

この頃先輩から、「ホテルに来られるお客様は、うまい物を食べに来られるのだから、少々高くても絶対に「うまい物」を出せ。そのためにもどうしたらいいのかを考え



ろ」と云う教育を受けました。どうしたら美味しくなるかを一生懸命勉強しました。当時のホテルは、今と違ってお金持ちしか行けませんでしたが、我々が行こうと思っても、とても高くて行けなかったのです。もちろん給料も今の様に世間並みにはとてももらえず、厳しい状態でした。この頃、私がお世話になっていた宮入先生（胸部外科医）が、「時々勉強しなくちゃね」と云って、ホテルのレストランへ連れて行って下さり、仔牛のカツにフォン・ド・ヴォーのかかった料理を御馳走になって、『世の中にはこんな美味しい物もあるのか！』と思う程強烈な印象を受けました。私には思いません。『よいし、こんな美味しい料理を早く作れる様になって、世の中の一人でも多くの人に、本当に美味しい料理を

食べていただけの様になるう」と。これが、厳しい職人の世界を、じつと歯を喰いしばって頑張った。これた大きな支えの一つでした。

私たちの年代の者は、育ち盛りや働き盛りの頃に、戦争という大変な時期を過し、食べ物が無く空腹に悩まされたことから、美味しい物に対する強い憧れを持っていると思うのです。私も正しくその一人でした。特に、私がこの道でやってみようと思えることとなつた原因の一つに、母の影響力がすごく大きかったと思います。

母は、料理を作るのがとても上手でした。近所で祝い事などがあると、必ずといっていい程お手伝いに呼ばれていました。また、家族の誕生日には、明治生れの人にしてはとてもシャレたオムレツやカレーライス、ステーキ等々必ず大御馳走を作ってくれたものです。そんな母がよく言っていました。「着る物は清潔で綺麗がしてあれば大丈夫。けど食べるものを切りつめて着飾っている家族は不幸になるよ！」と。食べ物の足りない当

時は、栄養失調で体の具合が悪くなる人がとても多かったのですが、私の家族はおかげで皆元気に育ちました。

今、時代が変わり、何でも好きな物が好きなだけ食べられる時代になりました。我々が味わつた空腹の辛さを、子供達にさせたくない思いから、我がままと許し、それが栄養の片寄りにつながり、大変な事態を引き起こしているという事に気付いている人がどれくらいおられるでしょうか。

最近、かなりマスコミでも取り沙汰される様になりましたが、若年性成人病とか小児糖尿病等々になる人が増えているそうです。これらは、大半が親の無知と子供の我がままから起る、食生活の乱れが原因と私は思います。何とか早い時期に、この食生活の乱れを直し、バランスの取れた栄養を確保して、「健康人間」が一人でも多くなる事を願って止みません。

今回は、JA愛媛厚生連の新山博彬健康管理部長にお願いします。

……リレーでちょっとトーク……

私たちがつくった縄文の村

松山市 十亀 幸雄



この遺跡は、愛媛県では稀な縄文時代の村の跡です。縄文時代の竪穴住居跡が発掘調査で何軒か出てきました。

他の遺跡発掘のほとんどがそうであるように、この遺跡も工事が始まると破壊されてしまいます。

「もうこんな時間だ」と、いつも通りの朝七時三十分頃家を出る。夜の遅い塾教師をしている私には、それは大変なことです。松山の家を出て一時間少し、川辺の仕事現場に着くと、調査員や作業員の人たちがもう発掘現場を覆っているシートをはがしている。朝の作業点検が始まる。

「一号住居は、今日中に遺物を取り上げます。三号住居は昨日に引き続き掘り下げて床面を出します。昨日と同じ人がついて下さい」などなど指示をする。ここでは、私は、遺跡発掘調査の「現場監督」なのです。

しむことのできるものとして川岸を整備しようと、行政の方で協議されたのでしょう。遺跡の復元もその対象とされたのです。これは、まったくの幸運でした。

発掘調査は夏に終わり、護岸工事が始まりました。私は、また、普通の塾教師に戻り、自宅で、町の土木課から依頼された遺跡復元の設計にとりかかりました。

それでも、ついつい塾教師の癖が抜けきれなくて、しばしば、見学にくる町長さんに、「すこしの範囲でもいいから、遺跡を残さないでしようか」「この現場に縄文の村跡を復元して下さい」と訴えて、悪あがき。

ところが、ヒヨンなことから「遺跡をその場に復元する」ことができることになりました。

遺跡の復元と川辺の水際空間整備事業の目的とがうまくい場合に合致したのです。従来のようなブルックの護岸といった治水対策のみの整備ではなく、市民が川と親

復元する作業はなかなか大変でした。県内で初めての試みであったため、参考になるものがなく、土木課や工事を担当した会社の技術者、そして私の二人での試行錯誤でした。なかでも、竪穴住居などの掘り込み部の工事が大変でした。左官さんに復元遺構面仕上げをしてもらったら、弧状に仕上げ痕が残り、自然な土の感触がどうしても出ません。試行錯誤でやっているうちに、布で表面を叩くと良い結果を得ました。また、私の設計図の不備で、凹になるべき遺跡の部分が凸となっていて、作り直したりもしました。

ともかくにも、縄文の村跡は

出来上がりしました。復元された面積はわずかです。しかし、ここには、かすかにですが、縄文文化の香りがするのです。そして、その背後には、この村跡を発見した人をはじめとした多くの人々の何がしかの思いが込められているのです。

小さな川辺の中に、小さな縄文の村跡があります。「愛媛県周桑郡小松町小松川藤木遺跡」これが、私たちがつけた縄文の村の名前です。小さなこの縄文の村に、是非来て下さい。

今回は、鬼北の版画家菊澤尋吉氏にお願いします。



元

氣

印

レ

ポ

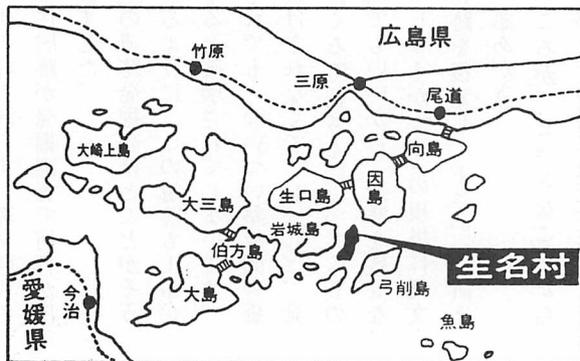
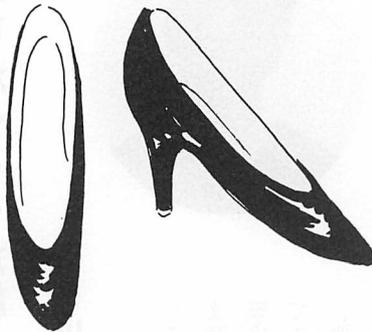
一

ト

私たちはこれからです

いきな女性塾

浜田 久美子



★名前は決定

「女性塾ができるから一緒にしゃべりしようヨ」と誘われ、「一泊の旅行にも行けるよ」との甘い言葉に乗せられて集まった十三名のメンバーは、顔を合わせればそれぞれに知っている人達ばかりで、気軽に会は開かれました。

まず、塾の名前を決めるのですが、いきいきとした粋な生名(いきな)の女性の集りと自負している私達は、村の名前がネーミングにもステキで自分達にピッタリと思いいきな女性塾に決定しました。

★何をしようか

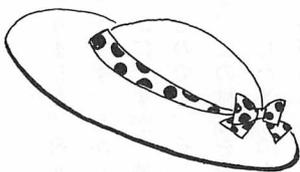
この女性塾は、愛媛県からの依頼で、市町村の助成金で運営される一年間の活動組織です。

短い間に何をするか、何ができるか、村の担当者が決めていた目

標は、『美しい島、美しい海を次の世代に伝えるために役割を認識し、女性の立場から暮らしの視点で環境を考える』さらに『男女共同参加型社会とは』等について考えることでした。

でもそんな堅苦しい話はちよつと置いて、もっと気楽に私たちに適したモノで既成の会には無い、皆が肩の力を抜き仲間の和を作り本音でぶつかり自分の為に何かを得る、そして過ごした時間はムダではなかったと思えるような女性塾に芽生えていきました。

「それでは何をやるの?」という話になると少し行き詰まるので



★話したこと・聞いたこと

女性大学に参加した人は、魅力的な女性のための講義を受けてきたり、呉女子短大の先生を招いて女性のみ経験するお産の話の聞いたり、体験談を話したりしました。

若松進一先生を囲んで村づくりの話を楽しく聞き、元気づけられたり、また、会に参加するたびに帰りの時間が気になり、気に掛けるを得ない女の立場について話し合ったこともありました。

子供が高校を卒業すると、ほとんどが村から離れて再び村には帰ってこない現状を成すすべもなく見ている私たち。鮭でさえ生まれた川に帰ってくるというのに。自然の法則に反しているのでは？ また必ず訪れてくる自分達の老後の事等々……。

母として妻として女として、私たちが直面する問題は色々あります。

★小さな事から

まず取り組める事は何だろうということ、台所から出るゴミの減量化をめざし、コンポストを設置して生ゴミは自分達で処理し、また、毎日の買い物は袋を持参し省資源を考えています。

この他にも何に取り組むか考え、話し合いをするうちに時間は過ぎ、愛媛県に報告書を提出する時となり女性塾は一応終わりました。

形としては何もしないうちに終わったようですが、皆の気持ちの中は、始めたときと今とでは比べられない程パワーが充満してきたように思います。

この心の変化が、女性塾のねらいだったのかも知れません。

★これからの私達

「自分達の思いを気ままに書いて、『女性塾たより』として発行

しよう。目標は一年は続けよう」ということで今、メンバーの人が第一号を作成しています。

先進地視察として行きたかった湯布院へ、自分達で行く為の資金の積立も始めました。

どのような方向に進んで行くのか未知数ですが、女性の感性と秘めたエネルギーを乗せて、瀬戸内海の端っこの「いきな生名島」から船出を始めようとしています。

どのよう



右端が浜田さんです。



地域に風を やれば出来る 我らの風車

正山風の会会長
土居 貞 丸

■正山風の会の発足■

脇川町の北東に位置する正山地域は、大洲市と隣接し、戸数百七十五戸で人口六百五十人あまりの過疎化の進む地域です。そこで、正山分館に於て「考えて見ようや、わしらの地域」と云うタイトルで三回に亘るシンポジウムを開き、大勢の方々の出席を頂きました。そして参加者より一言ずつ、平素感じたり考えておられる事を発表



して頂き、その意見の取りまとめを行いました。その意見の中から次のような取りまとめが出来たわけであり、まず、気軽に話せる仲間づくり（いろいろな会合、行事に多くの人が参加して頂く）二、地域に自慢の出来るものが欲しい（場所、芸能、その他）

三、自然、環境の見直し（河川、道路、山、住宅等）
四、農業の考え方の見直し（地域に合った農業、兼業農家の生き方）

五、地域づくりの意識を高める（地域の様子をビデオで紹介、芸能、シンボルのなもの）
大きく分けて以上のような意見の取りまとめが出来ました。

この問題を具体化し、実行するためには別の会を組織しようと言う事になり、平成元年四月二十一日に「正山風の会」が発足した訳であります。

直ちに役員編成を行い、はからずも私が選任され、会長に就任したわけですが、風の会では文化部、観光部、産業部の三つの部制を設け、それぞれ希望の部に入って各活動を行っています。

■活動成果のあらまし■

平成元年八月十五日には、「第一回正山風の祭り」を行いました。丁度正山小学校が校舎建替えになるため、お別れ同窓会を行おうと

云う事になり、北は北海道、南は九州まで全国から六百名の方が郷里へ帰ってきました。懐かしい



焼肉パーティー。

同窓生、そして地域の人達も併せ約千二百名が集まり、焼肉パーティーを行い、賑やかなまれにみる祭りになりました。
先ずこれには、シンボルマークを作ろうと云う事になり、標高五百四十八メートルの「京の森」と云う山一杯に、『風』という字を

イルミネーションで作り点灯し、参加者から大好評を得ました。

それ以来、毎年設置し正山のシンボルとして皆さんに親しんで頂いています。

何と云っても、地域おこしのメインは、過疎化の歯止めとして地域に人を増やす事が第一であります。風の会では、「一坪一万円」のキャッチフレーズで正山地域に住宅団地を造ろうと云う事になり、風の会で場所を選定し、その地主との土地交渉を行い理解を頂き話がまとまりました。

さっそく町にお願いして、畷川町住宅協会でもって、一区画約百坪のものが三十区画造成出来たわけであります。これには町内はもとより県内外の方々からも申し込みがあり、「若い方を」と云う事で選考し、全区画の販売も済み、三月から第一号の住宅が建築されている処であります。

この用地に全部の住宅が建てば、念願である子供達が増え、地域の正山小学校も現在七十人程の生徒数が、一挙に百二十人あまりにな

るだろうと期待している処です。

公園「風の憩」の造成も出来ました。これは地区の有志のお力添えを頂き、二千平方メートルの園地に、会員達が労力奉仕によりイチヨウの木やサツキの苗を植え付け、園内には東屋を二棟、トイレ一棟を建て、夜間照明も取り付け立派な園地となっております。

何をやって、作業の後には皆で焼肉や会員達が取って来たアユの塩焼き、カジカを焼いて酒を酌

み交わしています。このことでコミュニティションが図られ、また、次への夢も語り合うなど、アイデアも出て何んとも言えない雰囲気となります。

■住民の心に、

やる気を起こす風を■

正山地域の活性化を目指し、風おこし運動のシンボルとして出来上がったのが、今回のオランダ式の風車であります。高さ約六メートル、幅約三・六メートル、羽根車の直径六メートルであります。住民の心にやる気を起こし、地域の自慢とし、しかもこれは自分達が作った物だと云う意識が皆なに出てきて誇りとなっております。

この風の会の良いところは、皆が労力を惜しまず、何をするにも、さっと二十人から三十人の人が集まって来て一つになってやれるところ。これは地域の一人ひとりが、地域の事を思う心が熱いからであります。この気持ちを大切にして今後も頑張るって参りたいと思っております。



↑公園「風の憩」



⇒イチヨウの木の植付け

「自分の殻を打ち破れ」

～まちづくり先進地みて歩記～

(財)愛媛県まちづくり総合センター
藤原元久

◇プロローグ

今回私たちは、五月二十七日から三十日にかけて、群馬県新治村、長野県小布施町、浪合村を訪れた。

それぞれの地でいろいろなタイプの人に会い、まちづくりに関わるお話を聞くことが出来た。ここに新治村、小布施町、浪合村について私見を交えながら紹介します。

◇湯快村「にいほる」

東京から上越新幹線に乗ること一時間十分余り。群馬県上毛高原駅に着く。車で十五分程走れば「ゆたかないで湯の里」湯快村新治村に入

る。東京と新潟を結ぶ国道十七号線のほぼ中央に位置し、面積百八十二平方キロと広く、その約八割が山林原野である。人口は八千三

百人ほど、利根川の支流赤谷川が村の中心を縦貫し、首都圏の水源機能を有した緑豊かな山村である。群馬県下五大温泉の一つに挙げられる猿ヶ京三国温泉郷を有し、また全国一の規模を誇る群馬サイクルスポーツセンターやゴルフ場、スキー場を持ち、年間百万人の観光客が訪れるという。

◇たくみの里づくり

ここ新治村の目玉ともいうべき事業に「たくみの里づくり事業」がある。その企画・運営について先駆的役割をしてきたのが、観光商工課長の河合進さんその人である。

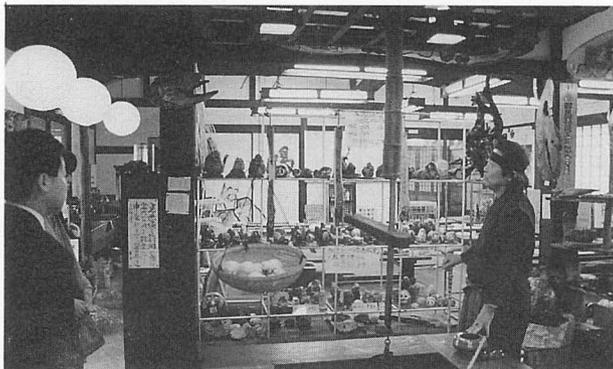


新治村 河合 進さん

観光と農業の結びつきを重視しながら「人を活かし、地域を活かす」を基本理念に繰り広げられてきた。「画一化されたものではなく、如何にその地域の特色を引き出すことが出来るかがポイントですね。観光開発をしていくなかで、人と地域とのふれあいを最大のテーマに、まち・むらの将来像をしっかりと見据え、自分の地域を見つめ直し、やる気と情熱と誠意を持って取り組むことが大切なんですよ。」と熱く語る河合さん。地域にある人材おこしを徹底的に行い、名人を捜し出し、旧三国街道の須川宿周辺に設定された野仏めぐりコース(全長八・五キロ)添いに「たくみの家」を設置した。手作り郷土かおりの家を出発地点に、石画の家、和紙の家、陶芸石工の家、わら細工の家、木工の家、竹細工の家などがミニ周遊コースの中に点在しており、それぞれの家では名人が快く迎えてくれる。ここでは手作り体験が出来るようになっており、常に人と人とのコミュニケーションが図られるよう

に配慮されている。純朴な農村風景の中に身を置くと、温もりのある人と人とのふれあいがあり、私たちが忘れかけていた感覚をそっと呼び覚ましてくれる。そこには『日本のふるさと』がある。

豪放磊落な河合さんの迫力に圧倒されながらも、今後のまちづく



たくみの里「石画の家」

りへ明るい展望を抱きつつ新治村を後にした。

◇北斎と栗のまち小布施
長野の県北に位置する小布施町

は、人口一万一千八百人、総面積一九・二平方キロメートル。古くは長野県下でも有数の養蚕地帯で、現在は風土を生かしたりんごやぶどう栽培が盛んであり、江戸時代には將軍家への献上品だったほどの品質の良い栗を使った栗菓子^{くりこし}の製造や、世界的な浮世絵師葛飾北斎の町として知られている。

◇歴史と文化のまちづくり

小布施のまちづくりは、昭和五十一年の「北斎館」開館を契機として始められた。地方の小さな町での美術館建設の珍しさと北斎の肉筆画だけを集めた日本唯一の美術館ということで注目を集めた。

町民の間には歴史と文化の共存する町の住民であるという誇りが芽生え、文化活動、地域づくり活動への取組みが一段と活発になったという。さらに北信濃きっての文化人高井鴻山の隠宅で当時の文化人のサロン的な場となっていた「ゆう然楼」を高井鴻山記念館として公開しようと町から提示されたとき（昭和五十七年）、小布施堂の市村さんをはじめ、周辺の関係

地権者が、先にオープンしていた「北斎館」も含めた周辺一帯を歴史的景観をとどめる文化ゾーンとして整備することを提言した。以来、町並み修景事業が進められている。

◇修景事業によるまちづくり

歴史的景観を残しながら、美しい自然と快適な住環境との融合を図るのが修景事業であり、質の高い文化創造を行っている。その中心として活躍されているのが栗菓子店の老舗、小布施堂社長市村次夫さんである。

「行政と民間は互いの思うところ



市村次夫さん 小布施町

ろに差異がある。お互いがその違いを認め合い、互いの持つ情報の

レベルが拮抗し、バランスがとれていればうまくいく。小布施はその点でうまくバランスがとれている町ですね。」と柔らかな口調ながらも眼光鋭く指摘する市村さん。

「そのコミュニティにとって重要であるからこそ守ろうとするんですね。それを守ろうとするときに不釣り合いなものを排除するばかりでなく、良いものをどしどし誉めてあげればより良い状況が生まれてきますよ。」とも言っている。

「造船工事に例えるならば、船体工事は行政がやり、機装工事は民間がやっていたいけば面白いことが出来ますよ。」と語る市村さんは、「私は小布施のために後押しをしてくれる有能なスタッフのサポートスマンだと思っっているんですよ。」と決して驕りたかぶることはない。

「栗の小径」を歩いていると、人におおよそ小美術館という雰囲気漂わせている小布施堂を出て、栗の木のブロックを敷き詰めた「栗の小径」を歩いていると、人にやさしいまちづくりが着実に活かされていることを実感せずには

いられない。
◇山紫水明の地、浪合村



長野県の南西端に位置する浪合村は、面積五十七・二四平方キロメートル、人口七百六十八人である。村の中央には天竜水系に注ぐ浪合川が流れ、その兩岸に集落と耕地がわずかに開けている。平均気温十一度、



浪合村 近藤庸平さん

「栗の小径」

寒さは厳しく、全国有数の多雨地域でもある。しかし、この厳しさは、一方では全国一、二を争う星空の美しさも楽しませてくれるという。そんな山紫水明の美しい自然を持つ浪合村で、役場の産業建設課農政係近藤庸平さんに出会った。

◇村の通りを持つ学校

昭和四十年代頃から、三百五十区画の別荘地開発や第三セクターによるゴルフ場、スキー場の建設などいち早く観光開発を手がけてきたが、観光による村づくりだけでは定住化や根本的な過疎対策にはならないことが見えてきたという。村民自身が生き甲斐を見いだせる村づくりこそが求められねばならなかったのである。

そんな時に新しい村のシンボルとして「浪合学校」が建設された。山間の地に忽然と現れるモダンな校舎、おおよそ田舎の風景には似つかわしくないデザインだが、そこだけが突出しているという風ではなく何となく周りに溶け込んでいる。保育園、小学校、中学校が



「浪合学校」

一体的に計画され、さらには地域利用が想定された施設づくりがなされている。そこでは人の行き来が自然に行われ、普段どおりの温かなあいさつが交わされる。まさに、村の通りを持つ学校である。

◇活き活き「トンキラ農園」

耳慣れない響きがあるその農園は、八・五ヘクタールの農地に、山村の原風景と農業を中心とした暮らしを温存・伝承し、それを高齢者の生き甲斐、就労の場、地域

間交流の場に結び付けようとする基本的な理念のもとに形成されている。(トンキラ「唐白」とは川の流れを利用した水力製粉機のこと)

そこで夕食をしながらの座談会となった。おかずとして出されたものは全て農園で採れたもの。勿論手作りの味である。用意をしてくれたおばさんたちの雇託のない笑顔を見ると、おいしさが二倍にも三倍にもふくらんだ。そこは人と人のふれあいを腹一杯食べさせてくれるところである。

「なぜ自分の地域が好きなんですか？なぜ愛着を感じるんですか？それはそこで過ごしてきた時間の中で、体でその町の歴史を感じてきたからです。この地域のことなら誰にも負けないという気持ちから生じるものなんですよ。そこに気がつくこと。そして、実

際に自分の目で良いものを見て回る。その奥にある本質を見抜く目を養うことが大切だね。そのためにはもつともつと歩き回ってみたいいいね。」タバコに火をつけ

ながら、そう語りかける近藤さんの目にキラリと光るものを見た。

◇エピソード

「まちづくりは二十年、三十年のスパンで考えること。町の将来を見通し、地域の特性を引き出すために何が良いのかを見極める目を養うことが大切である。」「自分の殻を破り、今までと違った視野で物事を見ることができたならば、もつと面白いことが出来る。」と言われる。この三日間でいろんなタイプの人たちに出会うことが出来る。ようやくまちづくりの方向がおぼろげながらみえてきたような気がする。



まちづくり見聞録

INヨーロッパ

(財)愛媛県まちづくり総合センター研究員
御荘町教育委員会 山岡 強

強

パリの
ロンドンの
街

■ああ芸術の都パリ

「二月のヨーロッパは、年間で最も寒い時期だから…」と言われ、スーツケースにジャケット等詰め込んで参加したこの「まちづくり総合コース」のヨーロッパ研修があったが、異常気象なのかたまたまなのか、思ったほど寒くない。それに、観光と研修と目的は違うけれども、「死ぬまでに一度は行ってみたい!」と夢にまで見ていたヨーロッパ



〈歴史の重みを感じる
パリの美しいまち並み〉

ロッパである。心弾まぬ訳がない。しかし、油断は禁物である。前研修地のウイーンにおいてもそうであるが、ヨーロッパの治安の悪さはつとに有名である。これまで大したトラブルもなく、我々一行は次の研修地である芸術の都パリへと入った。

■フランスにおける都市空間の創造

フランスにおいても、人口の都市集中による都市問題は、近年極めて深刻である。都市問題を解決する方途として、一つはウイーンに見ることのできた、都市内部を改造する都市再開発事業であり、もう一つは膨張する都市人口をニュータウンの建設によって分散しようとするものである。フランスにおけるニュータウン計画の実施は他の主要国に比べ遅れたが、

実際にニュータウンが如何に建設されているかを、二月十日、パリ郊外に建設中の五つのニュータウンの一つである、「エブリー・ニュータウン」で視察した。

■フランスにおけるニュータウンの特色

従来、都市周辺部に建設された集合共同住宅は、最大規模のものでも一〜二万世帯、人口にして三〜五万人程度のものであった。しかし、それに対して計画されたニュータウンは、人口十〜五十万人までで、都市として自治を有することが意図された。これまでパリ地方に建設された集合共同住宅は、基本的な性格としてベッドタウンであり、あるいはパリからあまりにも遠隔地であるため、地方の大都市に依存し、都市として自治を発展させることが不可能で



（ロンドンにも公園が多い）
全市民の誰もが徒歩5分で行ける場所に緑地が…。

ユータウンを建設する際には、住民を満足させ得る新しい都市空間を創造するための根底となるべき建築思想が要求されたのである。

■ニュータウンの誕生

「エブリー・ニュータウン」は、パリ南郊三十キロのセーヌ河沿いに位置している。かつての純農村地帯が、近年パリの都市化によって、無秩序なスプロール化が最も急速に進行しつつある地区である。将来、当地区において人口五十万人の中規模都市を建設する予定であり、現在、すでにその約半数の住民が居住している。

ニュータウンの行政は、特別な機関によって行われている。現地にある土地取得のための機関、事務所や工場誘致計画とその実施のための機関、諸施設を建設するための融資機関、政府に直結している地方・国土整備のための計画機関等が、ニュータウンの計画と運営を主導している。しかも、無秩序な郊外の都市化を回避するために、公的な機関による規制手段も講じられている。その公的機関は、

ニュータウン全体の首尾一貫したイメージを守り、全体の市民生活を保障するために、各活動に対して規制を加えている。

生活空間の基本となる街区は、当然中心的な機能が集まり、居住空間と商業施設をはじめとする諸機能が結合している。一つの街区のあらゆる地点に、徒歩で十分以内に達することができ、個々のアパートにはテラスの空間が備わり、ゆとりのある居住空間として注目されているのである。

■異国の地に見たものは：

二月十一日、ロンドンへと入った。ロンドンでのテーマは、『高齢者福祉と地域ケア』である。

視察で訪問した、ロンドン郊外にある民間のデイケアセンター「ミハエル・ソーベルハウス」では、毎日二百五十人の高齢者が日本円にして七百五十円を払ってやってくる。この金額での運営は当然無理なので、国の援助に頼っているわけのだが、私が驚いたのは、そこに従事するボランティアの数である。その数なんと四百

人。いくら福祉の国イギリスといっても、研修を進めていく間、日本では考えられないような数字



〈ミハエル・ソーベルハウスの老人たち〉
元気で明るい。

がボンボン出てくるのに驚くばかりであった。

話は変わるが、実はこの研修を通じて二つ残念なことがあった。

一つは、ウィーンとパリにおけるベットの「フン害」である。

我々が日頃、見たり聞いたりするヨーロッパの情報というと、美しいまち並みなんかを想像しがちであるが、足元はなんともお粗末であった。まち並みばかりに見惚れていると、それこそ「泣き」を

見てしまうことになる。

もう一つは、日本人のマナーの悪さである。このシーズン、大学の卒業旅行とやらで、右も左も日本人ばかり。それはそれでよいのだが、「恥のかきすて」感覚なのか、なんともマナーが悪い。カメラなんかでも、フラッシュ厳禁の場所で平気でパチパチやっている姿は、見ていてなんとも恥ずかしい思いであった。

最後になりましたが、この誌面で十分な研修報告をすることが出来なかったことをお詫びしますとともに、ロンドンでの福祉事情等についての詳しいレポートは、またいつかの機会に報告することとして、私のヨーロッパ研修のレポート

は、一先ずこの辺で筆を置くことにします。



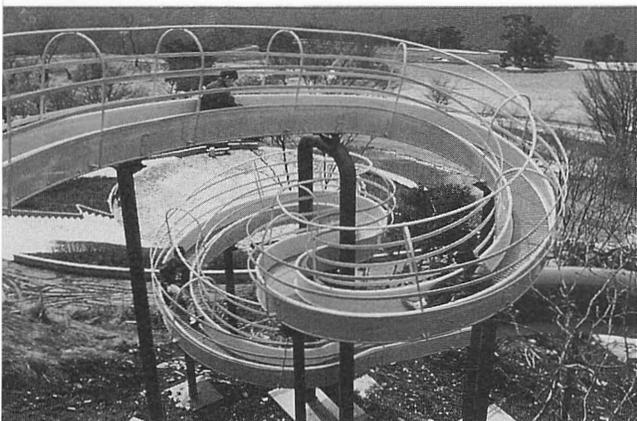
〈エブリーニュータウンの住宅〉
土地は広く、緑地が多い。

彫刻のあるまち

新居浜市

「宇宙は一人ひとりに無限の可能性を与えてくれた。少年少女よその宇宙に向かって自由な心でおもいきってはばたいてほしい」と作品「陽の中で」の作者の近藤哲夫さん（東予市）は語りかける。

また、「未来を創出する新居浜市民のエネルギーを、天空に伸びて



いく双葉で表現し、優しさと明快なフォルムを御影石で追及した」と作品「萌いずる」の作者の堀内健二さん（松山市）は説明する。

新居浜市は、潤いのある文化的風土を街角に創出し、都市空間の質的向上を図るため、彫刻のあるポケットパークを昭和六十三年度から整備している。市内の南北基幹道路を「鋼の道」、東西の基幹道路を「平和の道」と位置づけて彫刻を設置している。「犬の見た夢・別子」「リズム&ハーモニー」

完成！ 翠波高原に 大型すべり台 伊予三島市

菜の花畑やコスモス園がメルヘンチックな伊予三島市の翠波高原に、また新たな魅力が加わりました。

大型すべり台「ツインループ」

（所沢市の佐々木実さん）、「女の子・二人」（今治市の阿部誠一さん）、「自然の恵みに」（宮窪町の宮内宏さん）、「SWELL」（松山市の相原誠則さん）に今春の二基を加えて合計七基となった。

さらに、コミュニティ道路には「夢はるか」（京都市の谷口淳一さん）と「ゆとり」（東予市の近藤哲夫さん）が今春設置された。

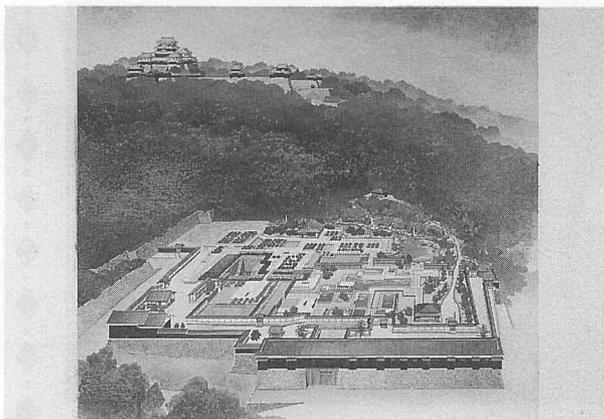
マイントピア別子の「仲持」（今治市の阿部誠一さん）と数えていくと現在十基の彫刻が座っている。

スライダー」は、高低差二十メートルで総延長が百三メートルのビッグスケール。さぞかし「お尻が痛い」だろうとお考えになるでしょうが大丈夫。すべり面には直径三センチメートルのアルミローラーを二千六百本使用しているの、適度に気持ちがよく、ヒップアップに効果があるとの噂も……。 「ツインループ」という名前の通り、すべり台が連続して二回転するのが大きな特徴で、そのほかにもシングルループが一か所と、



アーチ式トンネルが二か所あって、スリルは「赤丸百二十点」です。

翠波高原では、今年も七月下旬ころからピンク、赤、白のコスモスが可憐に咲き乱れます。四国山地が広がる雄大な眺めの高原で、夏のひとときを過ごしてみるのはいかがでしょう。家族連れやカップルで、またお友達と一緒に、今年はずいとも「初すべり」を！



松山城
二之丸史跡公園
完成！
松山市

「春や昔十五万石の城下かな」と子規によって詠まれた松山に「やすらぎの空間」が誕生しました。

松山城二之丸史跡庭園は、文化の発信基地として、四季折々に親しみ、楽しむことのできる都市空間です。

この史跡庭園には、各地の坎キツ類や草花で昔の間取りを表現した表御殿と、水や砂利、芝生を使って表現した奥御殿。そして、露岩を背景に池や滝により醸し出される「わび」「さび」。また、文化的な催しに利用していただける「観恒亭」「聚楽亭」「勝山亭」など、活用される史跡として全国的にも

珍しい整備がされています。二之丸邸は、慶長七年（一六〇二）に加藤嘉明によって建設が開始され、蒲生忠知の時代（一六一七〜一六三四）に完成を見たと言われています。

「今、歴史はトレンディ」
あなたも、園内に残された大井戸遺構や復元された楼閣に触れ、往時をしのび、いこいのひとときを過ごしてみませんか。

やさしく・清潔に
公衆トイレ完成
中山町

ウッドクラフトの里のメイン施設の一つとして、公衆トイレ（優良木材活用モデル施設）がオープンしました。

この施設は、昨年のウッドクラフトセンターに続くもので、従来



のトイレのイメージ「4K」を一掃すべく、当町産の杉や桧等の優良材をふんだんに使い、外壁は白壁、入口には格子戸、天井は木組みをそのまま見せるなど「木のぬ

くもり」を活かした純和風の建物です。ゆったりとしたスペースを取るため、百十四平方メートルを費やし、床は大理石、タイルには叫花の梅、特産の栗、椎茸等をワンポイントに砥部焼であしらひ、三ヶ所の天窓を取り、採光に気を配っています。

身障者用トイレも設備し、女性用には着替えのできるスペースもありベビーベッドも備えています。たかがトイレ、されどトイレ、一生つき合うトイレにこだわって



みました。是非一度、ウッドクラフトの里へお越し下さい。

ふるさと公園完成

河辺村



このほど、かねてより建設中でありました村民待望の「河辺村ふるさと公園」が完成しました。

この「ふるさと公園」は、村営簡易宿泊施設「ふるさとの宿」の背後に、あたかも万里の長城を思わせるテールアルメ壁を使用して造成し、野外ステージを備えた

「お祭り広場」をメインとしています。この広場への連絡には、県指定民俗文化財「御幸の橋」を彷彿させる「屋根付き橋」で結ぶなど河辺村固有の文化を採り入れてみました。

溪流広場では、あの昔懐かしい水車が回り、展望広場には、夜空の星が観測できる天体ドームを備えるとともに、展望広場からお祭り広場へは、子供達が歓声をあげて滑る「ジェットスライダー」で結びました。

まだまだ未完成の部分も沢山ありますが、今後ますます充実整備し、皆様が満足していただける公園としていきます。

山里の美しい自然に触れるひとときを「河辺村ふるさと公園」で……。



風が育てる
健康野菜
瀬戸町

は風力発電による電力を供給するモデル温室が完成しました。

早速四月一日、メロンとキュウリを播種、四月十三日には定植、五月十五日からキュウリの収穫を開始しています。

天窓、カーテンの開閉、液肥供給ポンプ、ヒートポンプ等の電力を風力発電で賄っています。

自然と環境にやさしい風のエネルギーが生命の源を育てる新しい試みです

小中学校の体験学習等に開放することとされていますが、佐田岬へお越しの際は、是非お立ち寄り下さい。御案内いたします。

風はそれは、自然がもたらす永遠の力です。ある時はやさしくそよ風として私達にさわやかさを与えてくれます。そしてある時は、怒りを爆発し、荒れ狂う事もあります。瀬戸町では、風との共存、風のエネルギーを利用しようと昨年度風力発電施設を建設。本年度



Town タウン

パソコン通信ネットワーク

ついに、 パソコン通信 100万人時代!!

Vol. 23

Human Communication & Network



えひめコンピュータコミュニケーションクラブ

今年二月七日から十三日までの一週間、大洲市の肱川流域グリーンピア情報センター内にホスト局を置く農業情報ネットワーク「ひばりネット」で、パソコン通信による「全国農業サミット」が開催されました。

当サミットは、パソコン通信を利用して「農と食の安心を考えろ」をテーマに、農業者、消費者等幅広い層の方々に参加を求め、時間と距離を超越した全国規模の公開討論会を実現しようと、肱川流域グリーンピア構想事業化推進協議会が開いたものです。

当サミットの実施方法は、「ひばりネット」の電子掲示板機能を利用して、基調講演、パネルディスカッション、参加者からの質問や意見を受付け、公開討論会風に

演出したもので、全国のパソコン通信ネットワーク三十四局の協力により、次の日程で行われました。

二月七日 基調講演 参加者からの質問受付

八日 参加者からの質問受付

九日 基調講演者からの助言

十日 パネルディスカッション

十一日 パネルディスカッション・参加者からの質問受付

十二日 パネラーからの回答

十三日 大会宣言 終了

全国初の試みで、盛況裡に終わった当サミットの結果について、主催者は次のように報告しています。「サミットへの参加者数は予

想を上回る数だったが、発言数はその割には少なかった。実施方法に対する意見では、「書き込み方法がわかりにくかった」「展開されている内容が難しく入り込みにくかった」「質問時間が少なかつた」などがあった。また、開催期間中に休日が二日間あったが、休日は予想に反して参加者が少なかった。一方、協力していただいたパソコン通信ネットの中には、「ひばりネット」との二元中継のような形で進められていたところもあり、パソコン通信を使つて

様々な方式で討論会が可能であることも分かった。今回は初体験で、いろいろ反省点があるが、次回はこれらの経験やいただいたご意見を踏まえ、またパソコン通信の機能と今回サミットに参加していた人の輪を通じて、時間と距離を超越したユニークな集いを実施したい」

以上、今年二月に行われたパソコン通信を利用したユニークなシンポジウム「全国農業サミット」をご紹介しますが、パソコン通

信が強力な情報収集及び情報発信手段として、一般の人々にも認識され、普及している今日、マスコミから一方的に流される画一的な情報に満足し、流されるだけでなく、「情報とは何か」を自分に対応させて問い直してみる時期にきているように思います。

ひばりネット

大洲市、喜多郡（内子町、五十崎町、肱川町、河辺村）、東宇和郡（宇和町、野村町、城川町）の八市町村の自治体、農協、森林組合で構成する、肱川流域グリーンピア構想事業化推進協議会の農業情報ネットワーク。当協議会は、農山村の活性化を図るため、昭和六十二年八月二十日に発足し、実験事業を行い、平成三年四月に当ネットを開局し、構想実現に向けて取り組んでいる。

愛媛県組織改正

愛媛県では、「生活文化県政プラン21」に掲げた構想の具体化をはじめ当面する重要課題を着実に推進できる体制とするため、4月1日付けの組織改正を発表しました。

主なものは、次の表のとおりです。

改正内容	担当事務等
「知事公室」（秘書課、広報公聴課、国際交流課）の設置	開かれた県政及び地域レベルの国際化を一層促進するため、知事に直結し、機動的、弾力的な対応が行えるよう、「知事公室」を設置しました。
伊予三島病院、南宇和病院及び新居浜病院の組織強化	○伊予三島病院 「泌尿器科」、「麻酔科」及び「循環器科」を増設しました。 ○南宇和病院 「皮膚科」、「泌尿器科」、「麻酔科」及び「脳神経外科」を増設するとともに、「人工透析室」を設置しました。 ○新居浜病院 「救命救急センター」を設置するとともに、「麻酔科」及び「循環器科」を増設することになっています。（平成4年8月1日実施予定）
瀬戸内海大橋架橋用地事務所「用地課」の設置	瀬戸内海大橋の平成10年度末の完成に向け、体制を強化するため、「課制」を敷きました。
「愛媛県花き総合指導センター」の設置	栽培技術の向上、消費の拡大、花との触れ合いの場づくり等のため、幅広い花きの総合指導機関として「愛媛県花き総合指導センター」を設置しました。
「全国豊かな海づくり大会準備室」の設置	平成5年度に本県で開催される「第13回全国豊かな海づくり大会」の準備を行うため、水産局に「全国豊かな海づくり大会準備室」を設置しました。
試験研究機関の「ライン制」の実施	農林水産部及び商工労働部関係の研究機関について、研究指導責任体制を明確にするため、ライン制としました（主席研究員を廃して、室制としました）。 また、保健環境部及び水産局関係の研究機関についても、整合性をとるため、室制に改めました。

INFORMATION

地域づくりビデオ貸出しのご案内

(財)愛媛県まちづくり総合センターでは、「地域づくりビデオ」を用意し、無料でお貸ししておりますが、今回下表のビデオが新規に揃いました。既存のビデオと併せ各種内容のものが揃っておりますので、是非ご利用下さい。

No	タイトル	時間(分)
①	飛騨高山からのレポートー朝市から高山展までー	24
②	島に生きるー活性化へのみちのりー	27
③	国際化は町から村から	30
④	新しいふれあいを求めてー地域間交流へのチャレンジー	29
⑤	ードキュメントー全国地域リーダー養成塾の記録	24
⑥	いま、リゾートづくりは…ー地域づくり現場からの報告ー	28
⑦	若者を呼び戻すー県境のむらの模索ー	33
⑧	まちをデザインするーまちづくりのハードとソフトー	30
⑨	まちづくりビデオ情報Vol.1 光と陰の錯綜する都市ほか	40
⑩	まちづくりビデオ情報Vol.2 燃え上がる千葉県ほか	40
⑪	まちづくりビデオ情報Vol.3 都市と情報発信機能ほか	40

六月も半ばになり、そろそろ梅雨入りの声が聞かれるようになり
ました。

ところで、雨にもいろいろありますが、読者のみなさんはどんな
“雨”が好きですか？私は、やさ
しい霧のような雨が好きです。

雨も好きになれば、じめじめ
うっとうしい梅雨の一日も楽しく
過ごせそうですね。

内容についてのご意見や活動内
容についての記事など、お気軽に
お寄せください。

「舞だうん」編集係

二人のM.s.(毛利・安田)まで

〒七九〇 松山市三番町八丁目

二三四番地

愛媛県生活保健ビル三階

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

TEL

〇八九九(三三)七七五〇

FAX

〇八九九(三三)七七六〇

発行・平成四年六月十五日

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

えひめ地域づくり研究会議